

田崎悦子が自身の音楽人生を背景に 提唱・主催するピアノ・ワークショップ

Joy of Music 2008

3月23～30日 ●清里高原ハイランドホテル

取材・文＝道下京子

撮影＝八木光裕

世界を舞台に30年以上にもわたり第一線で活動を続けるピアニスト、田崎悦子。近年は桐朋学園大学・同大学院特任教授を務めるなど、教育活動にも積極的だ。2002年からは、自らが主催する合宿型のピアノ・ワークショップ「Joy of Music」をスタートさせ、今回で7回目を迎えた。3月23～30日の期間中、筆者は28～29日取材した（於：清里高原ハイランドホテル）。

多忙な音楽活動の中、なぜ「Joy of Music」を立ち上げたのかを、田崎に尋ねた。

「私の音楽教育の源は、桐朋の青空教室……齋藤秀雄先生や吉田秀和先生、そして井口先生たちの燃えるようなパッションの中にあるのです。食べるものもない時代に、何故みんなあんなことができたのだろう、と。父兄たちも協力的でしたし、個性のある子がたくさんいました」

田崎は18歳で渡米し、ジュリアード音楽院に学んだ。海外の取材を受けた際、「あなたも桐朋出身ですが」と聞かれたという。同じ時期の桐朋出身者には、小澤征爾や秋山和慶、堤剛らがおり、日本の音楽学校の教育が大いに注目を集めていた。そしてもう一つ、田崎の音楽人生におけるバックボーンには、マールポロ音楽祭がある。カザルスやルドルフ・セルキンらとともに、ひと夏を一緒に過ごした場所だ。

「そこで学んだのは、作曲家に対する謙虚な姿勢です。『われわれは作曲家の僕なのだ』というフィロソフィーがあるのです」

自らの経験を生徒たちに伝えたい……そんな田崎の思いが「Joy of Music」に込められている。募集した参加者の条件は、ピアニストを目指す12～27歳。しかし、応募者の中には10歳の子もいた。送られてきた録音を聴いて、彼女の参加を受け入れたという。小学4年生～大学4年生までの14組15人が、8日間の合宿に挑んだ。オープニング・コンサートに始ま



田崎の指導によるオープン・レッスンに受講生も耳を傾ける



田崎はピアノを学ぶ上での室内楽の重要性を強調する



受講生によるディスカッションタイムでは、実にさまざまなテーマが語られる



参加者全員が互いの音楽に耳を傾けた。清々しいファイナル・コンサート（3月29日・長坂コミュニティステーションホール）

り、田崎によるオープン・レッスン、室内楽レッスン、スペシャル・イヤー・トレーニング、農業体験などを含む自然散策、そしてファイナル・コンサートで合宿は完結する。そのうち、筆者が拝聴したのは、28日のオープン・レッスンと室内楽レッスン、そして29日のスペシャル・イヤー・トレーニングである。

ホテルの音楽堂で行われるオープン・レッスンでは、参加者は2組に分けられ、1日1組ずつ田崎の個人レッスンを受講する。午後2時～6時半までの間、参加者全員だけでなく、聴講生も数多くレッスンを聴いていた。曲目は任意により、シューベルト（即興曲）D.935-3（小4）やバッハ（BACHの主題による幻想曲とフーガ）（高1）などが演奏された。

レッスンを拝聴して最も印象的だったのは、自分自身を気付かせるような、あるいは生徒たちの感性を研ぎ澄ませさせるようなアドバイスをし、良いところがあれば必ず褒める。日本の教育において欠如しているコーチングに近い接し方である。

また、レッスン中、田崎は「音を選んで」という言葉を生徒に語りかけていた。この言葉と密接に結びついているのが、スペシャル・イヤー・トレーニングである。この講義を合宿に採り入れた理由について、田崎は「日本人の耳は、西洋人の耳と違うとよく言われますね。ここでは、繊細な音楽や語学に通じるようなトレーニングもします」と語る。講義では、オーディオ製作者の八木光裕氏により、八木氏が製作したオーディオを使用し、74年前のホルターの演奏から美空ひばりの歌、そして足音など様々な音を聴き比べ、遊び感覚で楽しみながら「耳」を磨いていくものであった。

そして、夕食後には参加者全員によるディスカッションの時間も設けられていた。「演奏はコミュニケーションです。自分の思いを伝えられなければいけません」と田崎は言う。音楽の話題だけではなく、恋愛のことなど日常的な会話が、アットホームな雰囲気の中で交わされた。

ディスカッション後には、室内楽のレッスンが行われた。これは、田崎が経験した桐朋時代やマールポロでは、日常的に行われていたことであり、どうしてもスケジュールの中に組み込みできなかった。「ピアノという楽器を一人で勉強するにあたり、室内楽はとても重要です」と語る田崎。お互いの音を聴き合うことで、和声感をはじめ音楽的な構造がよりわかりやすくなるという。さらに、ここにもコミュニケーションの重要性が如実に現れてくる。レッスンでは、連弾（モーツァルト〈4手のためのグランドソナタ〉）とチェロ&ピアノ（ショパン〈華麗なるポロネーズ〉）が演奏され、チェロには特別ゲストとしてアメリカのカーシャ・ベラック＝フープスが招かれた。田崎の指導の他に、ベラック＝フープスのアドバイスも行われ、室内楽のレッスンは、午後9時半頃まで続いた。

参加者全員がレッスンを聴き、それぞれが徐々に変化してゆく過程が、筆者にもとてもよくわかった。他の人の演奏に耳を傾け、お互いの音楽作りを自分のことのように考えながら聴いている様子も実に微笑ましい。

この「Joy of Music」の活動を、田崎は「私の心」と語った。今夏には、魚津と奈良でも行われる（年齢制限なし）。



農作業の時間には、自然に触れながらコミュニケーションを育む。独特ながら意義深い活動だ